

「東北画は可能か？」～東北芸術工科大学チュートリアル活動～

※ここで言う“チュートリアル”とは、東北芸術工科大学の先生と学生と一緒に興味や関心のあることを楽しむ課外活動のこと。

※本誌53～55号の表紙に、以下の通り「東北画」を使用しています。

53号「静かな色」・54号「夢」・55号「盛花の宴」

「東北画は可能か？」。この問いは、「日本」「東北」という辺境で、地域名を冠にした絵画の成立の可能性を探る試みであり、地産地消のアートマーケット、東アジアへの展開を視野に入れた挑戦として2009年11月から私が勤務する東北芸術工科大学でチュートリアル活動*をスタートさせました。それは「東北」とくくりにされた風土、価値観の投影に対するローカルからの逆襲でもあり、ひとつの言葉ではけっしてくれないさまざまなグラデーションをたどり全国から集まった学生たちが自らの制作動機を探る旅でもありました。

東北画は旧来の日本画のように画材や制度に規定されることなく、私たちが縁あって「今」「ここ」にいるという場所の歴史的な成り立ちと自身の関係性とを読み解き、それらを表現する際に最も必然性のある素材や技法を再選択しています。つまり東北画の「東北」部分にはさまざまな言葉を代入でき、将来的にどこに住もうが、何が起きようが力強くモノを生み出して欲しいという私から学生への願いでもありました。

そんな中、昨年の11月にリアスアーク美術館（気仙沼）で「東北画は可能か？」の作品展を開催することが決まり、学生メンバー10名が「アーク（^{はこぶね}方舟）」をテーマに共同制作「方舟計画」の準備を進めていた時のことです。私たちが次代に向けて方舟に何を乗せ、何を置いて行くのかをディスカッションし、その内容を元に下絵制作を終え、さあ描き始めよう！としていたまさにその日の3月11日14時46分、あの地震に東北は襲われました。



東北画「方舟計画」

リアスアーク美術館の甚大な被害を含め、気仙沼の惨状はここに書くまでもありませんが、メンバーにも被災した実家へ戻る者やボランティア活動に向かう者などがいて、被害の少なかった山形でも絵を描ける状況ではありませんでした。重苦しい時間が流れ、「つらい」「苦しい」という言葉は禁句となるような状況が続きましたが、一方で東北という冠を持った美大で東北という冠を掲げた東北画が何も表現しなくていいのか？という思いがメンバー内で膨らんでいきました。

「方舟計画」はそんな苦しい状況下で生まれ、続くように今回の表紙絵の共同制作「盛花の宴」が制作されています。不安と忙しさの中でしたが、彼らは根源的に今の思いを描き残したかったのだと思います。自己治療としての描画と社会へ向けた他者表現の間を激しく行き来しながら、僕たちは今日も画面に向かっていきます。

東北芸術工科大学 美術科准教授 三瀬夏之介



東北画は可能か？

芸工大の日本画・洋画の教員と学生が、「東北画は可能か？」という共通テーマを掲げ、それぞれの「東北」を描く活動を2009年から続けている。蔵王山麓（さんろく）に位置する独特な気候風土の中で、作家として何を表現できるのか？制作と展示を通じ議論を重ねている。

表紙

チュートリアル「東北画は可能か？」

花散舞チーム代表：石原葉

東北画「盛花の宴」（綿布にアクリル絵具）

Future SIGHT 2012年冬号 第55号

平成24年1月30日発行

定価：1,050円

落丁・乱丁はおとりかえいたします。

本誌掲載の記事・写真・図表などの無断転載を禁じます。

印刷・製本：株式会社 大風印刷

編集・発行：株式会社 フィデア総合研究所

〒990-0043 山形市本町1-4-21 荘銀山形ビル8F

TEL 023-626-9017 FAX 023-626-9038

URL <http://www.f-ric.co.jp/>

E-mail kikanshi@f-ric.co.jp